



「女性が思わずドアを開けたくなるような サイズ感が魅力」(飯田)

VOICE

「スバルがここから変わっていく予感がある」——そう語るのは自動車ジャーナリストの飯田裕子さん。
職業柄、年間に100台以上もの試乗をこなすクルマのプロフェッショナルの目に、
レヴォーグはどのように映ったのだろう。同時にひとりの女性として、レヴォーグから何を感じ取ったのだろうか。

想像していたよりも、ずっとスタイリッシュで格好よかったです。これまでのスバル車は大雑把に言えば無機質でシンプルで機能的、どちらかというとやっぱり「男のクルマ」ってイメージが強かったから、たとえ気に入ったとしても女子には少し手が出しにくかった。でもレヴォーグにはちょっと色気があって、国内専用車と言いつつながら欧州車と見比べても遜色のないスタイリングになっていますね。

女性の場合、例えば気心の知れたオンナ友達とランチを食べるような軽い外出では、「クルマだし近所だからスッピンで部屋着のままでもいいや……」とオシャレ心を怠けることも。レヴォーグには、インナーをごまかしてくれるシャレたコートのような心強いデザイン性が感じられます。それは、日常のわずかな移動でも少し小綺麗にしてハンドルを握りたいと、女性の気分を上げるスイッチのようでもあります。レヴォーグに乗ると、日常の束の間の移動が非日常へと切り替わり、そしてもっと遠くへ、あるいはこだわりの場所へ出かけてみようと思うのではないのでしょうか。

女性は格好でクルマを選ぶ傾向があります。ワゴンも



飯田裕子 | いだゆうこ
自動車ジャーナリスト
自動車メーカーに就職する一方で、クルマ好きが高じてレースにもプライベートで参加。退職後、フリーランスの自動車ジャーナリストとなる。雑誌やウェブ、テレビやラジオなど多くの媒体で活躍するとともに、ドライビングスクールのインストラクターなども務める。

これまでは男性が選ぶ傾向が強いクルマだったけれど、レヴォーグなら女性も選択肢に加えることができるでしょう。ユニセックスな雰囲気のスタイリングの力もあるけれど、ちょうどいいサイズ感も理由のひとつ。女性にとって大きなクルマや威圧感のあるデザインは、それだけで近寄ることすらおっくうになってしまいがちですが、レヴォーグには思わずドアを開けてみたくなるようなサイズ感がある。乗ってみてもちょうどいい空間がそこにあって、必要なものへすぐに手が届くし、なんとなくほっとするんです。

だから、なおさら走りへの期待が高まりますね。女性も実は乗り味に敏感。移動中のわずかな時間でも、日常の生活と切り離してくれる気分になれるクルマは、女性にとってポイントが高いんです。ダウンサイジングの1.6リッターエンジンもとても気になります。持て余すくらいのパワーは必要ないけれど、街でも高速道路でも必要にして十分な、扱いやすい動力性能が備わっていると嬉しい。クルマって時刻表に縛られない自由な移動が魅力。レヴォーグなら身近な行動範囲を広げ、旅先ではもう少し遠くまで足を伸ばしてみたいくなる、そんな乗り味。スバルは走りをごだわるメーカーなので、レヴォーグはサーキットで走ってもきつとそれなりのパフォーマンスを見

せてくれるでしょう。実際にサーキットを走る女性は少ないですが、それくらい性能があるというのが安心感につながります。自動車ジャーナリスト的な視点から言うと、パッケージやタイヤの位置からも、走りの良さが想像できますね。

カップルやご夫婦でレヴォーグを共有されても、きっとどちらも満足できるのでは。男性はゴルフなどに出かける道中でドライビングを楽しめるでしょうし、女性は生活感のないアクティブな時間に身を置くことができたり、リフレッシュ効果も期待できそう。もちろん、ふたりで乗ればまた別の世界が広がるかもしれません。何より、購入する際に女性が味方についてくれるクルマというのは、男性にとってまたとないチャンスでしょう。



「クルマの経験を積んだ大人に 乗って欲しい、日本のクルマ」(金田)

「シューティングブレーク(狩りの道具を積むために作られたクーペベースのワゴン)のオシャレで
贅沢な雰囲気似ているかも」——ファッション業界でクリエイティブな仕事に従事しクルマに対する
造形も深いビームスの金田英治さんは、レヴォーグの第一印象をそう表現した。

感じていただけたと思います。

デザインも好印象です。「スポーティな色気」を感じました。大人っぽいけれど若々しさもある。主張が強すぎるデザインを突きつけられると人のほうが置いて行かれてしまうことがあります。レヴォーグのデザインは奇抜ではないのに随所に新しさを感じます。スタンダードなアイテムに現代のトレンドを適度に採り入れた、永く着られる服といったところでしょうか。その距離感も絶妙で、荷物をいっぱい積んでどこかへ出かけるということのみならず、荷物の存在を忘れ、ただ運転する楽しみだけを味わう。そして停めた自分のクルマを眺めてまた満足する、そんな妄想も膨らみます。

大人のほうが、レヴォーグを魅力的に感じるかもしれません。SUVや輸入車など様々な乗り継ぎ「今のクルマ」に求めるものが明確な人や、ブランドバッチやステータスではなく、本質を見極めてクルマを選ぶ人こそ、レヴォーグの良さが理解できるのではないのでしょうか。



速くから初めてレヴォーグを見た時、実は「意外と普通?」と思ったのです。ところが近くでよく見ると、とても凝ったプレスラインになっているので驚きました。ディテールまでこだわっているなど。これまでのスバル車は比較的シンプルな造形だったので、余計にそう感じたのかもかもしれません。

さらにレヴォーグを眺めてみると、そのサイズ感に好感が持てました。普段は社有車でアウトバックを使っているのですが、ひとりで乗るにはもったいないくらいの居住空間が広がっている。けれど、

レヴォーグにはひとりで乗ってもびったりなサイズ感がある、「パーソナルカー」とか「スペシャリティカー」という言葉を思い出してしまいました。自分のための空間。そう呼べるようなちょうどいい広さなのです。これ

まで、そういう空間を有しているのはスポーツカーやクーペだったのですが、ワゴンでこんな気持ちになったのは初めて。レヴォーグは、他に比較するクルマがないのでは、初代レガシィワゴンは道具というクルマに乗る感覚。スキーやキャンプへ行くのに荷物を積めるし四輪駆動だから雪道でも安心。そういう使い方をするにはベストチョイスですが、アクティブな用途が際立ってしまうと、そうではない人にとっては「自分のためのクルマ」と思いくなくなってしまう。でもレヴォーグは、ラゲッジルームに積む荷物がなくても買う価値や魅力がある。それは、クーペやカプリオレをスタイリングで選ぶような感覚に似ている気がします。

例えば、大人のファッションではサイズが肝心です。サイズが合っていないと、服本来の良さも体感できません。自分の魅力も引き出せない。自分にフィットした服を着ると自然に背筋も伸びるし、スマートな印象を与えることができます。クルマも同じではないのでしょうか。窮屈なほど小さくなく必要以上に大きくもない。等身大にフィットすれば、それだけで心地良い。クルマにもジャストサイズというのがある、それをスバルなりに提案している。それがレヴォーグだと思います。クルマ好き、特に運転好きの方には、ジャストサイズという意味を共



金田英治 | かねだえいじ
株式会社ビームス
執行役員 社長室本部長兼
広報部長
1966年東京生まれ。1990年より販促PR担当として広告、カタログ製作などを手がける。その後、総合企画室を経て現職。広報業務と並行して新しいビジネスモデルの開発や異業種との様々なコラボレーションなどを行っている。